

稲城野草散策の会

野草スケッチ ユリワサビ（アブラナ科）



1996/04/02

稲城市浜坂

絵と文 Ta

愛用し、かつ、フィールドへも持っていく草花の図鑑は、山と溪谷社から出版されている「山溪ハンディ図鑑」シリーズの「野に咲く花」「山に咲く花」などである。行く先に応じて、稲城だったら「野に咲く花」をショルダーバッグに入れる。

ユリワサビは、「山に咲く花」に載っている草本である。

会報第26号 2007年2月25日発行 発行責任者 尼子 房夫

多摩丘陵では見かけないし、高尾山にはあるので、やはり「山の植物」といえる。ところが、ユリワサビが稲城市内で咲いていた。

見つけた場所は、稲城市坂浜地区である。

京王相模原線・稲城駅から遊歩道を通って、駒沢学園へ登るちょっと手前、鶴川街道が三沢川と交差しているあたりだ。

近くを探して、他にも何箇所か見つけることができた。

ユリワサビはワサビと同属で、ほのかな辛味がある。

ワサビとの違いは、水辺でなくても育つこと、根は貧弱で香辛料としては使えないこと、葉が小型でツヤがないこと、などが挙げられる。

葉ワサビの要領で食用にすることができる、と「山菜全科（清水大典著・家の光協会）」には書いてあった。

「山の植物」が、なぜ稲城市にもあるのだろうか。

稲城市の標高は、50～140mの範囲だ。山というには低すぎる。

疑問を持ちながらフィールドを観察しているうちに、見えてくるものがあった。

それは、三沢川流域に沿った地域に限定された分布を示している、ということである。

ユリワサビだけでなく、以前に紹介したアマナ、イチリンソウ、ヤマドリソウなども、同じく「三沢川流域型分布」なのである。

まだ紹介していない植物にも、同じパターンで分布しているものはいくつかある。

ただし、三沢川流域といっても、丘陵のかなり高い位置まで分布が見られる。

大まかに言えば、三沢川の両側300mの距離、標高差にして50m程度の範囲までを含めての分布である。

考えられることは、多摩川で見られるような「漂着者（ハナウドの項参照）」ではないだろうか。

上流に、これらの植物の「供給源」があるのかもしれない。

三沢川の源流は、稲城市から西へ5 kmほど西の、町田市と多摩市の境界付近である。

源流までさかのぼったことが何度かあるが、源流といっても田んぼの湧き水であり、その先は雑木林、畑、人家になってしまう。

生えている植物は「三沢川流域型」とは違っている。

再調査を行ったが、ユリワサビは見つからない。「供給源」ではないと思った。

あるとき、稲城高校の地学の先生と一緒に、キャンプ村近くのフィールド（稲城市坂浜地区）を歩く機会があった。

地層について教えていただいたのだが、関東ローム層と稲城砂層の間に、小石や砂利が混じった地層がある。

多摩丘陵に岩山はないので、通常ならば、小石や砂利が流れてくるはずがないのだ。

これは、大昔の三沢川（古三沢川）が置いていった「れき層」であり、石を分析すると、丹沢のものが見られるのだそうである。

要約すれば、次のようなことになる。

50万年ほど前、古三沢川は、現在の八王子あたりに源流があった。

源流付近には、さらに古い時代に古相模川が丹沢などから運んで置いていったれき層（御殿山れき層）がある。

古三沢川は、御殿山れき層から、小石などを二次的に稲城まで持ち込んだ。

稲城地区の古三沢川の流れは、現在よりも50m程度高い位置を流れていた。逆にいえば、50万年かけて三沢川が谷を削り、現在の位置まで下がったのである。

・・・先生のお話を伺って、目から鱗が何枚も落ちた。

現在の源流をいくら探しても、それらしい植物は見つからなかったわけである。

植物で感じた疑問をさかのぼっていくと、源流は「地学」のあたりに潜んでいたりする。

もっと地学についての勉強もしたいが、そう思いつつ数年がいたずらに過ぎてしまった。

* * * * *

〔行事記録〕 1月20日 七草摘み

21日の七草粥の準備に、38人の参加があって、黒川で七草摘みをしました。ここ数年この日は雪です。今年は晴れるかなと思っていたら積もりはしませんでした。ちゃんと雪が降ってきました。それでも七草粥のための七草はちゃんと採ってきました。セリ、コオニタビラコ、ナズナ、ハコベ、ハハコグサ、タネツケバナなど、スズナ、スズシロ以外は用意出来ました。

今年は、思いもかけないハプニングがありました。昼に汁守神社まで帰って来たら、暖かいオデンと甘酒が待っていたのです。雪で冷えて帰ってきたので、本

当にうれしいご馳走でした。準備して下さった瀬戸さんに感謝、感謝です。午前中で七草摘みは終了して、午後は残った人で、植物の観察をしながら黒川を一回りして解散しました。それでは、今日またお逢いしましょう。(FAM)

〔行事記録〕 1月21日 七草粥

20日の七草摘みに続いて、稲城市城山文化センターでの七草粥です。稲城駅に36人が集合しました。準備組と観察組に分かれて文化センターに向かいました。メインの七草粥とお汁粉のほかに七草を使ったおしたしやベーコン炒めなども用意されました。七草粥は、青い七草がたっぷり入ったお粥で、これは相当にご利益があったと思います。美味しかったですよ。

食べ終わったところから2007年度の稲城野草散策の会の行事予定の相談に入りました。初めての試みで、プロジェクターを使って、「おしゃべりるーむ」に寄せられた希望の場所を壁に写し、それを見ながらみなさんの希望をまとめて行きました。近郊の場所、稲城を中心とした場所で17箇所が決まり、それにバスハイクは、「富士山5合目」「霧ヶ峰高原」「清里」という三つの候補で投票し、「霧ヶ峰高原」(7月20日)に決まりました。2007年度の行事予定18回が決まりましたので、近々中に葉書でお知らせすると共にHPにアップしますので、今年もふるってご参加下さい。

行事は、定例の行事のほかに不定期のフローラオフも適宜開催しています。ご希望の観察場所がありましたら、観察会の際にでも世話役の方にお申し出下さい。スケジュールが合えば、開催します。(FAM)

◆「樹皮ハンドブック」の訂正

第1刷、第2刷で使用したカラマツの写真のうち、12ページと24ページの2点はチョウセンカラマツ (*Larix olgensis*) またはその系統種である可能性が判明しました。万全を期して、2007年1月25日発行の第3刷にて写真を差し替えましたので、皆様にお知らせいたします。(このきなんのき所長)

※差し替え前の写真(北海道富良野市内の植林地で撮影)は、カラマツの変異の一例を示す目的で掲載したものでしたが、その後の情報収集でチョウセンカラマツの可能性が浮上しました。チョウセンカラマツは、朝鮮半島周辺原産のカラマツによく似た樹木で、樹皮はカラマツに比べて縦に長く裂ける傾向があるようです。北海道の民有林では1970年代頃に植林されたことがあり、約50haが現存しているようです。(情報提供：北海道立林業試験場)

★ 差し替え用の写真がありますので、お申し出下さい。(尼子)

〔行事予定〕 2007/2/25 (日) 稲城城山公園

項目	説明
集合	am10時、JR南武線南多摩駅 ※会旗目標 南多摩駅の改札口は一個所だけです
行く先 (解散場所)	JR南武線南多摩駅から京王稲城駅まで(下の地図を参照ください) 京王線稲城駅にてpm4時頃解散予定
見所 その他	冬芽の観察
地図	
コース	南多摩駅～城山公園～稲城中央公園～清水谷戸～駒沢学園～ 京王稲城駅。(解散：4時頃) 駅近くにコンビニあり。途中、トイレは数箇所あります コースは天候その他により変更する場合があります ご用のある方は途中で抜けても構いません

※小雨決行 参加申込み不要、会費当日300円

〔行事予定〕 2007/3/24 (土) 皇居東御苑

項目	説明
集合	am10時、皇居東御苑大手門前 ※会旗目標
交通	地下鉄各線の手町駅 (c10、c13b出口) から約200m (徒歩約5分) JR東京駅 (丸の内北口) から約1000m (徒歩約15分) 皇居外苑から約600m (徒歩約10分)
行く先 (解散場所)	皇居東御苑内観察、pm4時頃解散予定
見所	皇居の樹木
地図	地下鉄各線の手町駅 (c10、c13b出口) からのアクセス 
皇居東御苑のURL	http://www.kunaicho.go.jp/11/d11-03gr.html
コース	3月3日に下見をして決めます ★下見の集合場所は上記と同じです。参加歓迎です

※小雨決行 参加申込み不要、会費当日300円

皇居東御苑の入園料は、無料です

* * * * *

◆ 「樹皮ハンドブック」の斡旋

最近発売された「樹皮ハンドブック」の斡旋を行います。「お知らせ」に詳細を書いておりますが、定例行事やフローラオフの際に配布します。(広沢)